

武蔵野美術大学  
造形学部教授  
**松葉一清**  
Kazukiyo Matsuba



# 科学的文明観なくして復興なし —帝都復興から今こそ学ぶべきこと—

## みそぼらしい科学

一九二三年（大正十二年）九月一日、関東大震災が起こる。明治以来最大の社会詩人と評された演歌師、添田啞蟬坊は東京下町・下谷の「いろは長屋」を焼け出され、逃げまどう群衆のなかを線路伝いに鶯谷までたどりつく。翌朝、夜明けに彼はこう述懐している。

「俺は線路に並んで真ッ赤な旭の色をジーツと見つめてゐた。ああ五十年の文化は脆くも破壊された。みそぼらしい科学よ。人間の力の弱さよ小さい自己よ」（啞蟬坊流生記）昭和十六年刊）  
みそぼらしい、つまり、みすぼらしい科学よ、

という文言を最初に見たとき、わたしは演歌師らしからぬ表現に驚いた。戦前を代表する表現者ではあるが、彼の住まいの「いろは長屋」は、ひと間が四八戸集まった、彼自身も認める「貧民窟」だった。そんなところから逃げ出してきた「科学」を口にするのが、にわかには実感できなかつたからだ。

## 後藤新平の掲げた「調査」

なぜ、関東大震災の復興が一般の東日本大震災と異なり、速度感を伴って成果をあげたかを考えると、「科学」が大きなキーワードであることに『帝都復興史』（昭和五年刊、高橋重治編著、

の成案に就いて審議評定し然る後に執行に移るを当然の要務とす」

復興にあたっては、まず火急の課題の調査を詳細に行い、それに基づいて科学的で合理と経済を満たす復興を進めよと、幹部職員に檄を飛ばしたのである。「上」も「下」というと語弊もあろうが、大正末の日本人は「科学」を尊重していた。後藤新平は幹部に「科学」を忘れるなど語りかけ、啞蟬坊は「科学」がみすぼらしいので、こんな大被害になったというのだから。

## 四〇〇〇の橋梁、一〇〇を超える小学校を 実現した「公共」

当初予算四〇億円の「大風呂敷」が、最終的に七億二、〇〇〇万円になったとはいえ、東京市長時代の後藤が震災の二年前に打ち上げた帝都改造が「八億円計画」だったことを勘案すると、九割の歩留りで、震災を契機とする復興の形で改造は成就したことになる。四〇億円計画は、国がいったん焼跡全部を買収して区画整理して払い下げるための予算が過半を占めており、この区画整理を民間で実施したため、風呂敷は縮んでも復興の成果には影響はなかつた。

しかも、復興事業完成を祝する「帝都復興祭」の開催までわずか六年半、銀座や神田、日本橋

には大正十二年内に、当時流行のアール・デコや表現主義を大胆に採り入れたバラック建築が揃い踏みする民間のスタートダッシュもあり、公共も四〇〇近い橋梁を架け替え、一一七の小学校を一気にコンクリートで新築、小学校併設の公園を五二カ所も開設した。

「橋」と小学校を、これだけの物量にわたって、当時最新の鉄骨やコンクリートの技術を投じて実現し得たのは、まさに「科学」の力である。それは東京市長時代の後藤に薫陶を受けた東京市の若い技術者たちが「科学性」を身につけていたからであり、市民の側も啞蟬坊が代表するように「科学」が、自分たちの暮らしの向上に繋がることに期待を持っていた。

そこに起きた関東大震災と、メディアが上滑りの「コンクリートからひとへ」という非科学的かつ煽情的な惹句を喧伝し、公共の役割を極小視する風潮を蔓延させたところに発生した今回の東日本大震災との落差に、切歯扼腕するのはわたしだけではあるまい。それが拙著『帝都復興史』を読む（新潮選書）を上梓した動機だった。

## 文明観、国土観が描く「東北の未来像」

東北の被災地、新たな恒久的な構築物の姿は、

興文堂書院）を通読して実感した。帝都復興事業を軌道に乗せた内相・帝都復興院総裁の後藤新平は、政治に「調査と科学」を求め、それが帝都復興事業に生かされたことを知った。

後藤は帝都復興院の辞令交付の二日後の大正十二年十月三日、幹部を集めて次のように訓示している。「今日帝都復興の時機に於て之が改善を計り科学上より見たる合理的施設の上に更に経済的なる計画を実現し、以て文明都市の実体を具備せしむべく深く意を用い畸形都市の跡を絶つの要あるは論なきところなり」

同じ訓示でこうも述べている。  
「先ず緊切にして精細なる調査を行い更にそ

海辺の旧市街にも高台にもない。政治にも官僚機構にも「科学」とそれに基づく「文明観」が欠落している。後藤らには「こういう帝都を、この際、構築するのだ」という科学に基づく文明観があった。だからこそ国家官庁と東京市役所から、有為の技術官僚を復興の企画立案に投入して帝都復興が成ったわけだ。

医学者だった後藤は、日露戦争を勝利に導いた陸軍の児玉源太郎に見出され、自身もまた若い官僚を抜擢してきたから、国家大難にあたって、復興を驚異の速度で軌道に乗せ得たのである。

その意味では人材育成と登用の怠慢、人材評価の形骸化が、現在の停滞を招いた。国民は政治家を育てず、政治家は官僚を育てず、それどころかおんぶにだっことなった結果が、被災地を凍りつかせたままにしている。

被災した東北に、二十一世紀の日本のなかで「なにを担ってもらうのか」を明確にしないかぎり復興は緒にもつくまい。直接には、一次産業を中心とする生産現場をまず復興しなければ、同情頼りの観光と商業では時をおかずに限界を露呈するだろう。人口動態の変化を出発点に、調査と科学という基本に戻った「東北の未来像」提言の必要を痛感する。